様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成　2010 年　6 月　10 日現在

研究種目：若手研究　(B)
研究期間：2008 ～ 2009
課題番号：２０７２０１６０
研究課題名（和文）　高等専門学校生のニーズに応じたタスクの開発と その実施効果に関する研究
研究課題名（英文）　A Study of Task-Based Instruction at a Technical College -Designing Tasks Based on Learners' Needs -

研究代表者
杉浦　理恵　　(SUGIURA RIE)
東海大学・国際文化学部・准教授
研究者番号：６０４１３７３８

研究成果の概要（和文）：本研究は、第二言語習得理論研究の分野で言語習得に効果的であると議論されている「タスクを中心とした指導 (Task-Based Instruction)」を日本の高等専門学校で実施することの可能性と効果について研究を行った。高等専門学校の学生を対象とし、英語学習に対するニーズ分析を行い、その結果に基づいて具体的なタスクを開発し実施した。本研究の成果については、論文と学会での発表という形で公表した。

研究成果の概要（英文）：Tasks, if designed to meet learners' needs, should provide optimal conditions for the particular language learning environment. Students in a Japanese technical college were asked to answer a questionnaire concerning their reasons for studying English, what skills or knowledge they needed to improve, and what content and activities they wanted to work on in the class. Based on these results, the relevant tasks were designed and proposed.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００８年度	700,000	210,000	910,000
２００９年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
年度			
総　計	1,200,000	360,000	1,560,000

研究分野：英語教育
科研費の分科・細目：教授法・カリキュラム論
キーワード：英語、カリキュラム、タスク、ニーズ分析

１．研究開始当初の背景

第二言語習得理論研究の分野ではタスクを中心とした指導 (Task-Based Instruction) が言語習得に有効であるとされている。「タスク」とは、たとえば、「開発した新しいコンピュータソフトを海外で販売するための

計画書を英語で作成し、発表する」などの現実場面に即した「課題」であり、学習者は当該課題を解決するために、（文法ではなく）メッセージの授受に重きを置いた言語活動を行うことになる。その際に、学習者は文法を含む既習の英語の知識を駆使しての言語使用が求められる。この中で、必要に応じて学習者の意識を言語形式 (文の構造など) に注意を向ける文法指導を行うことが言語習得に効果的であると議論されている。ただ、タスクを中心とした指導を長期的に実施した場合の効果を他の指導法との比較によって検証した結果はまだ十分には報告されていない。

また、タスクに関する多くの先行研究は、英語を第二言語とする ESL (English as a Second Language) の環境で、教室外でも目標言語の使用が必要な国で行われている場合が多い。そのため、日本のように英語を外国語として教育している EFL (English as a Foreign Language) の環境で、タスクを中心とした指導を全面的に導入している事例は多くない。

日本の英語教育においても、タスクを基本に「タスク活動」としてカリキュラムに取り入れる指導が提案されている。しかし、タスクを中心とした指導の効果について疑問を呈する意見もあり、既に実施されている実践例を踏まえながら、タスクを中心としたカリキュラムについて研究する必要があると考えられた。さらに、実施するタスクは、学習者のニーズに応じたものであるべきであり、特に、電気、電子、コンピュータ等の専門科目を履修している高等専門学校生に適したタスクを開発し、その効果を研究する必要があった。

２．研究の目的

本研究は、高等専門学校の学生を対象とし、第二言語習得理論研究の分野で言語習得上効果的とされる「タスクを中心とした指導」を実施し、その効果を研究することであった。特に、高等専門学校で実施されている ICT (Information Communication and Technology）の専門教育の内容を取り入れた具体的なタスクを考案・実施し、提案することであった。

３．研究の方法

(1) 高専生の英語学習の目的、必要性 (ニーズ) をアンケートによって調査し、タスクを中心とした指導に必須とされるニーズ分析を行った。ニーズ分析に用いたアンケート作成にあたっては、国内外で実施された質問紙調査を研究した。

(2) ニーズ分析に基づき、各学年と専門分野に応じたタスクの開発を行った。

(3) タスクを実施し、タスクを中心とした指導が言語学習への意欲、関心、態度に与える効果を研究した。

(4) 海外におけるタスクを中心とした指導について、文献を用いた調査を行うとともに、学会への参加によって情報を収集した。

(5) 上述(1）～(4) の内容を踏まえ、高専における学年と専門別のタスクを中心としたカリキュラムのあり方を考察した。

４．研究成果

(1) ニーズ分析の結果

高等専門学校生の英語学習に対するニーズ分析の結果、以下の点が明らかとなった。

①! 将来の仕事や海外旅行での英語使用など、実際に英語を用いてコミュニケーションをすることを意識している者が顕著である。

② 聞く力・話す力といったオンラインのコミュニケーションに必要な技能の不足を感じている者が顕著である。

③ 低学年と高学年では、英語を学習する理由、授業で学習したい内容や活動に相違が見られ、高学年ではより社会との関

連性がある内容に意識が向いている。

④ 英語を聞き取る活動や外国人と会話をするといったコミュニケーション重視の活動への関心が高い一方で、英訳や和訳、文法練習といった言語形式を重視した活動も必要と感じられている。

ニーズ分析では、多くの学生がコミュニケーションを意識した学習の必要性を感じながらも、語彙や文法の知識の不足を強く感じていること、高学年は低学年と比較して、より社会や専門教育に関連した内容を英語学習においても学びたいと考えていることが明らかとなった。この分析の詳細については、杉浦 (2009) に記載している。

（2）タスクの開発

高等専門学校生を対象に英語学習に関するニーズ分析を実施した結果に基づき、タスクの開発を行い、実践した。タスク作成の際には、国内外でのタスクに関する文献、及び実践例を参考にした。高等専門学校の低学年においては意味内容の伝達を中心としながらも、文法にも意識を向けさせるタスク (focused task) を、また高学年では、各学生の専門の研究内容を英語で発表する等の現実の課題に即したタスクが有効であると、論文で論じた。以下に、開発したタスクの具体例を示す。

① 低学年を対象としたタスク例

留学生とクラスメイトが、電話で一緒に出かける場所を決定するという設定で、2 人の行き先を聞き取るというリスニングタスクを作成した。タスク自体に予め目標となる文法項目を組み込んでおき、タスクの実施中や実施後に文法にも注意を引くことが可能になるようにした。このようなタスクの実施は、コミュニケーション重視の授業内容を求めているものの、文法への苦手意識を持っている学生、特に低学年の学生のニーズに対応しているものと考えられる。

② 高学年を対象としたタスク例

「外資系の企業にインターンシップのための面接を受ける」というタスクを作成した。このタスクの目標は、英語での面接を遂行することである。このタスクでは、履歴書を英語で書く際に必要な語彙を調べ、また面接で話す際にもその語彙を用いなければならない。面接の受験者、面接官ともに、タスクを達成するためには英語を聞いたり、話したりすることが必須である。高等専門学校の 4 年生以上では、企業でのインターンシップの機会があり、また就職の際に多くの学生が面接を受験するため、このタスクの場面設定は、将来の仕事に関連していると同時に身近な話題であると考えられる。

（3）諸外国におけるタスクを用いた教育

海外で実施されている「タスクを中心とした指導」の研究を行った。特に、台湾、アメリカ、ベルギーといった諸外国でのタスクを中心としたカリキュラムや実践例を研究し、日本の高等専門学校における英語教育への応用性を検討した。諸外国の実践例としては、「学校のホームページを英語で作成するタスク」や、将来学生が就く可能性のある仕事を想定したタスクが実践されていた。教室内での擬似的なタスクよりも、現実社会と接点を持たせる活動が多く実施され始めていることが明らかとなった。

また、台湾で実施された「タスクを中心とした指導」をテーマとした「第一回中日英語教育研究会」では、本研究の成果の一部を発表した。さらに、東京外国語大学で実施された「第二回中日英語教育研究会」において司会を務め、台湾の研究者及び教員とタスクの有効性について議論を行った。

(4) 高等専門学校におけるカリキュラム

高専における専門別のタスクを中心としたカリキュラムのあり方として「タスクを中心としたトップダウン型の指導モデル」を提案した。このモデルでは、「自らが製作したロボットについて英語で発表を行う」という

タスクや「海外の学生に高専について紹介するビデオクリップを製作する」というタスクを最終到達目標の例として挙げた。タスクを達成するためには、高専生はロボットについて説明するための語彙を辞書で調べ、英語で書かれた文献を読み情報を得なければならない。また、発表のための原稿を英語で準備することも必要である。さらには、英語での質疑応答に備えて聞いたり話したりする練習も行わなければならない。こういった点から、タスクを達成することを目標に、英語の4 技能を総合的に育成することができると提案した。

（５）異なる学校種との連携

タスクを用いたカリキュラムを効果的に実施するためには、高等専門学校のみならず、小学校での外国語活動、中学校、高等学校での英語教育との連携も必要となってくる。そのため、『英語教育フォーラム-小学校における外国語活動と中・高等学校における英語教育を考える-』を茨城工業高等専門学校にて開催し、フォーラムにおいて、地域の小学校や中学、高等学校の教員を対象に本研究の成果の一部を発表した。

（６）今後の研究開発

これまでのタスクは、授業で実施される教育的タスクを念頭に置くことが多かった。しかし、高等専門学校をはじめとした高等教育機関では、海外でのフィールドワークやインターンシップが広く進められ始めている。今後は、本研究で提案したようなタスクを教室内外での活動とどのように有機的に結び付け、カリキュラムに取り入れていくかをさらに検討していく必要がある。

また、タスクを実施した際の評価は、従来の筆記テストではなく、パフォーマンス評価であるべきである。そのため評価のあり方も、今後の研究課題である。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 2 件）

① 今井典子、杉浦理恵、奥村耕一、髙島英幸.「台湾の英語教育の課題から学ぶ日本の英語教育 - 「第一回中日英語教育研究会」からの示唆」『教職研修』(査読無) 7 月号．2009．pp.82-86.

② 杉浦理恵．「高等専門学校におけるタスクを中心とした英語教育の可能性 - ニーズ分析に基づくタスクの開発 - 」『茨城工業高等専門学校研究彙報』（査読有）44 号．2009．pp．7-16.

〔学会発表〕（計 2 件）

① SUGIURA RIE.“ A Study of Task-Based Language Teaching- Designing Tasks Based on Learner's Needs –” 第一回中日英語教育学会. 2009 年 3 月 27 日．国立台湾師範大学

② 杉浦理恵．「中学校・高等学校における文法指導と言語活動としてのタスク活動・タスクの必要性」英語教育フォーラム-小学校における外国語活動と中・高等学校における英語教育を考える-. 2009 年 3 月 17 日．茨城工業高等専門学校

６．研究組織

(1)研究代表者

杉浦　理恵　（SUGIURA RIE）
東海大学・国際文化学部・准教授
研究者番号：60413738